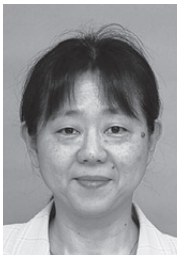


ずいひつ

Z U I H I T U



安全で良質な水を安定的に

札幌市水道事業管理者
水道局長

池田 佳恵

この4月1日付けで、水道事業管理者を拝命いたしました。私は昭和55年に札幌市職員として採用され、37年間に渡り、さまざまな分野の仕事に携わって参りましたが、水道事業は今回が初めてであり、札幌市民の暮らしと命に直結する最も重要なライフラインを担う職責を重く受け止めております。

札幌水道は、昭和12年に給水を開始して以来、今年で80周年を迎えております。この間、市勢の発展に伴う急速な市域の拡大や人口の増加などによる水需要の増加に対応するため、水道施設を整備し、現在では給水人口約194万人、給水普及率99.9%と全国でも有数の規模の水道事業に成長してきました。

一方で、全国的に水道事業を取り巻く環境は厳しさを増しており、給水収益が減少する中、多くの水道施

設が更新時期を迎えようとしています。また、近年多発する大規模地震や異常気象に伴う浸水被害の発生など、水道事業の安定を脅かす事象には枚挙に暇がありません。さらには、水質管理上のリスクへの対応、環境への配慮など様々な課題に取り組んでいく必要があります。

私どもは、これからも安全で安定した水道を将来へ引き継ぐため、利用者の視点に立ちながら、強靱かつ持続可能な水道の実現に向けての取り組みを着実に進めるとともに、計画的で効率的な施設の更新や維持・保全に全力で取り組んで参る所存でありますので、皆様におかれましても、これまで以上にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



3つの「わ」でつながる流域

名古屋市上下水道局長

丹羽 吉彦

なごやの水道は大正3年の給水開始以来、100年以上にわたり安定した給水に努め、「断水のない なごやの水道」という歴史を築き上げてきました。これは、先人たちのたゆまぬ努力はもちろんのことではありますが、水源とする木曾川の豊かで良質な水の恵みがあってこそのもと考えています。

古来より、木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川流域は、その豊かできれいな水の恩恵を受けてきました。木材や木炭、お米等の物資が川を下り、塩、麦、陶器等が下流から上流に運ばれるなど、上流と下流がお互いの地域の産業や生活を支え合い、水による強いつながりを持って発展してきました。しかしながら近年、上中流域では少子高齢化や過疎化が進み、農林業の衰退や担い手不足により、この豊かな水の恵みの源であ

る水源林の荒廃が懸念されています。

こうした中、平成22年10月に名古屋で開催された、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）を機に、水でつながる流域の自治体が、人の「和」をもって連携・協働し、豊かで清らかな水の「環」を守り、多様な生物の「輪」の生息環境を守っていくことを、流域自治体宣言として発信し、翌年には木曾三川流域自治体連携会議を設立しました。

この連携会議では、流域自治体の行政部門における連携の強化のほか、上中流域を中心とした産業の活性化のため、農作物や特産品の販売、上中流域の生産者と下流域の仕入れ企業との商談の場の提供など、地域経済の振興支援も行っています。

木曾三川流域の豊かな水環境を将来にわたり守っていくために、3つの「わ」でつながった流域全体が、一丸となって問題解決に取り組んでいけるよう、私も微力を尽くしていきたいと考えています。

ずいひつ

Z U I H I T U



震災の経験を糧として

熊本市上下水道事業管理者
永目 工嗣

熊本地震からちょうど1年目の平成29年4月16日、市民とともに大規模な災害対応訓練を実施しました。訓練とはいえ避難所運営に立ち会っていると、改めて1年前の苦難の日々を思い起こします。

「光陰矢の如し」。これが人間にとって最も言い当てた諺であり、極めて無常で悲劇的とは、小林秀雄の言ですが、悲劇的という点を除き、この1年については必ずしも当を得ていません。むしろ、今でも心は震災のあの日にあります。この1年を振り返れば、私の思考・判断は段階的に2つの異なる時間軸に置かれたと言えます。

一つには、発災当初、断水など多くの問い合わせの電話が鳴り響き、給水車には市民の長蛇の列、甚大な被害情報が刻々と入る中、「いま、ここでどう動く」

といった「瞬時」の臨機応変の判断です。

もう一つは、応急復旧も一段落した後、「将来世代に対してどう安全・安心を確保していくか」という「長期的」視野に立った深謀遠慮です。

「備えあれば憂いなし」と言いますが、「瞬時」の判断の基というのは、過去の被災都市の経験や何度も繰り返し行う訓練など経験則で得るしかありません。

また、将来世代への深謀遠慮も震災で得た経験から、教訓、課題をしっかりと捉え、計画的に備えていくことにあります。

いずれにしても、頭の中の想定で作成された計画やマニュアルは、ただ空しいだけの紙と化してしまいます。まさに「経験」に優るものなし。

熊本地震から得た、肌感覚ともいべき貴重な「経験」はできる限りリアリティのある形にして残し伝えなければなりません。そして、支援に駆けつけてくれた多くの都市ともこの経験を共有していくことが返礼につながる、そう思うこの頃です。



渇水に強い神奈川3つのヒミツ

神奈川県公営企業管理者
企業庁長

二見 研一

私は、昨年初めて水道の仕事に携わり、これまで驚くことが幾つもありましたが、中でも神奈川の水運用仕組みは、うなってしまうほど素晴らしいと感じます。

昨年は少雨傾向が続き、利根川水系で水不足が問題になりましたが、幸い、本県は大丈夫でした。これにはダムの存在が欠かせませんが、自然に任せるのではなく、24時間365日我が企業庁職員が貯水状況をコントロールして、初めて水の安定供給を実現しています。

しかし、この仕組みはほとんど誰にも知られていませんでしたので、これをアピールするのが私の大事な仕事だと思っています。そこで、複雑な仕組みを「3つのヒミツ」にまとめ、今年度から本格的にPRを始めました。

ヒミツ1は、4つのダムの存在です。狭い県土の中に、戦前から一つ一つ整備してきたもので、県管理の

相模ダム・城山ダム・三保ダムと国管理の宮ヶ瀬ダムと、4つの巨大なダムがあり、先人の先見性に感謝です。

ヒミツ2は、相模川水系の相模ダム・城山ダムは貯水量が5,000万 m^3 級のダムですが、集水域が広く水が貯まり易い一方、宮ヶ瀬ダムは2億 m^3 級ですが集水域が狭く貯まり難いダムです。これらを補い合うために、城山ダムと宮ヶ瀬ダムを道志導水路と津久井導水路でつなぎ、県と国とが連携して水の総合運用をしています。

ヒミツ3は、相模川水系と酒匂川水系の導水ネットワークです。小田原の海岸側から川崎市の山側まで県を横断する約60kmもの導水管が走っています。

いずれも、地下にある巨大なトンネルによってダムが連携しているからこそ渇水に強い神奈川が実現できています。これは知られざる神奈川県民の宝であり、全国・世界に誇れる壮大な仕組みであると思っています。是非、県民の皆様はもとより、企業を含めて全国の皆さんに知っていただき、神奈川県へ進出あるいは転居することへの後押しになればと考えています。